

月刊ウィーン

Monatsmagazin Japanisch
現地オリジナル取材と編集でウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊29年目 **Nr.339**
GEKKAN-WIEN 2017年11月号



杉本純の原子力の話 II 「ウィーンと京都」 72

杉本 純 (前京都大学教授 元原子力機構ウィーン事務所長)

筆者が勤務する東京工業大学グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェント教育院は、文部科学省の支援により「人類の生存基盤を脅かす核拡散、核テロ、大規模な原子力災害や緊急被ばく問題等のグローバルな原子力危機」の分野において、国際的リーダーとして活躍する人材を育成することを目的として、平成23年度より修士・博士課程一貫の学位取得プログラムを実施している。このプログラムは、深い専門性はもとより、幅広い社会性や国際性、さらに豊かな人間性を養い、時代の流れを俯瞰しながら、「高い志を持って、人々のため、社会のため、世界のために貢献するリーダーを育成する」ことを教育目標としている。学生は全寮制の「世界原子力安全・セキュリティ道場」に入門し、一部の教員も学生とともに住み、学生が互いに切磋琢磨する教育環境を整えている。

本プログラムの一環として国内外で研修・実習を実施しているが、9月19～22日にかけて、福井県敦賀市の日本原子力発電(株)敦賀総合研修センターにおいて、原子炉過酷事故(シビアアクシデント)シミュレーション実習を実施した。参加学生は5期生が3名(うち1名はマレーシアからの留学生)、6期生1名の計4名。4日間にわたり講義、シミュレータを用いた実習、施設見学等を行った。筆者はシビアアクシデントの専門家として学生を指導するとともに、日本原子力発電の講師等の日本語の説明を外国人学生のためポイントを英語で伝えた。宿泊所を含めた研修施設は、竣工約5年と新しく充実しており、特にシミュレータは最新の設備である。また、加圧式と沸騰式の二種類の軽水炉を見学することができ、学生にとっては有益な実体験をすることができたと思う。(本文、写真とも写真中に記載のurlより)。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市のサッカースタジアムについて述べてみたい。ウィーンのプラーター公園内にエルンスト・ハッペル・シュターディオンと呼ばれる、5万3千人の収容人数を誇る多目的スタジアムがある。欧州サッカー連盟(UEFA)が認定する5つ星スタジアムで、オーストリアA代表の試合会場である。かつてはUEFAのチャンピオンズカップ、チャンピオンズリーグ、カップウィナーズカップなどの決勝戦が行われた。また、ウィーンをホームとするブンデスリーガのクラブチームであるアウストリア・ウィーンのUEFA主催ゲームが開催される。ドイツの建築家オット・エルンスト・シュバイツァーの設計によって1931年に完成した。その後何度か改築が行われ、現在のモダンなスタジアムに生まれ変わった。

一方、京都市の西京極総合運動公園内にある陸上競技場兼球技場は、J1とJ2リーグを行き来するクラブチーム、京都サンガFCのホームスタジアムである。収容人数は2万人強。95年には日本対コスタリカの国際Aマッチが開催された。また、天皇杯全日本サッカー選手権大会、関西学生サッカーリーグ公式戦なども開催されている。陸上競技では、全国高等学校駅伝、皇后盃全国都道府県対抗女子駅伝、京都マラソンなどの会場となっている。2021年開催のワールドマスターズゲームズの開催に備え、また、Jリーグクラブライセンス制度の適合審査を受けるため、スタンド屋根の拡張などの全面改修を2018年まで実施中である。両市のサッカースタジアムは歴史と伝統を有するとともに、市民に好ゲーム観戦の機会を提供している。

余談であるが、筆者は西京極スタジアムの前を何度か通っただけで中に入ったことはない。エルンスト・ハッペル・シュターディオンでは2006年5月のオーストリアA代表とクロアチア代表の友好試合を観戦したことがある。美しい芝の緑が印象的だった。両市のサッカースタジアムを紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたエルンスト・ハッペル・シュターディオンの写真を掲載させていただく。

